

# 巻頭 派兵恒久法・米軍再編Ⅱ「防衛汚職」と対決しよう！

天野恵一

「その問題のシーンは、一月一日午後一時四〇分、自民党が提案した新テロ特措法の衆院採決の時に起こった。阿部知子・社民党政審会長による法案への反対演説が終わり、採決に入った時、突然、／『小沢代表はなぜ棄権するんだ！』／という大音声、議場に轟きわたったのだ。声の主は、自民党の3回生議員、中野正志代議士である。／『えっ？』／国民注視の法案採決だけに、ピンとした緊張感が漂っていた議場で、議員たちの目が一斉にうしろに向けられた。／小沢代表の座席は、議長席から見れば、正面より左側の最後列にある。二階席の新聞記者からは見えにくい位置だ。／渡部恒三氏、羽田孜氏、小沢氏、菅直人氏の四人が座っているはずのその民主党議員の最後列に、ぼっかり穴が空くように小沢氏だけがいなかったのである。／『民主党の小沢代表がいらないぞ！』／大島理森・自民党国対委員長が、すかさず野太い声で、中野代議士に続いた。／中野氏もさらに／『小沢の本心は（法案に）賛成なんじゃないのか！』／と追い打ちをかけた。／自民党席に爆笑が起る。／『どうなっているんだ』／『小沢さん、ホントにいないの？』／と野党席までざわつく。／それは文字通り、最高指揮官の「敵前逃亡」だった。

なんと、自民党の「新テロ特措法」（給油新法）の衆院採決（半世紀ぶりの三分の二による異例の再採決）の時、小沢民主党代表は棄権したのである。この『週刊新潮』（小沢一郎は『採決棄権』の常習犯）一月二四日号）が皮肉たっぷり描き出したこのシーンを私たちも忘れてはなるまい。自衛隊の海外派兵の継続をめざす、この法案は、安倍首相を「自爆」に追い込んだ後、新たに生まれた福田政権によって、公明党の抱き込み直しの政治プロセスを経て、ついに成立してしまったのである（中断していた海上給油はすぐに再開されることになる）。これに一貫して反対していた民主党の代表は、それなのに棄権である。「本心は賛成なんじゃないのか」という声には、奇妙なりアリテイがある。

『週刊文春』（一月二四日号）にはこうある。

「与党からの野次は、投票中もやむことはなかった。／『とくに安倍晋三前総理が元氣一杯でした。小沢代表がいないのを知ると、『本当は賛成なんだろう！』と野次つてた。近くに座っている小泉元総理は、それを聞いて思わず噴き出していた（笑）』（野党担当記者）／安倍前総理は、本会議後も黙っていなかった。／記者団に、小沢代表の棄権について聞かれた安倍さんは、「一番大切な日に、なぜ意思表示を棄権したのか、理解に苦しみますね」と批判しました。でもそれを聞いた記者はみな、「お前が言っな！」と心の中で突っ込んだはず。（自民党担当記者）（小沢一郎『敵前逃亡』のお粗末な理由）。

「お前が言っな！」の突っ込みは、記者のみならず、誰でもいれたくなるだろう。その点はともかく、小沢のこの態度は、何を表現しているのだろう。この記事によれば大阪府知事選の応援に行くためという理由が示されたが、採決をスッポかして出るほど急がなければならぬわけではなかったようだから、採決など、どうでもよかったのだろう。小沢民主党は自衛隊の海外派兵そのものに反対していたわけではなかった。そして提出された民主党の対案が、小沢・福田間で一時的に成立した「大連立」構想の共通のベースになった派兵恒久法づくりを呼びかけるものである点によく示されるように、平和憲法破壊へ、という基本的志向は自民党と同じなのである（だからこの民主党案を衆院自民党は継続審議することに賛成した）。小沢の態度は、こうした政治意思を露骨に表現しているものである。

自民党・民主党が裏で組んで推進しようとしている派兵恒久法づくりに反対する運動を、「米軍再編」・アフガニスタン、イラク派兵に反対する各地の運動と組んで、全力でつくりだすこと。「防衛疑惑」と「米軍再編」が表裏の構造であることを具体的に示し、「再編」反対の声を拡大し抜くこと。七月の北海道・洞爺湖サミットに対抗して、非軍事化「民衆の安全保障」の論議を各地と結んでつくりだしていくこと。これが非力な私たちに課せられた当面の大テーマである。ガンバロウ！